聖母女学院短期大学
同窓会々報

題字揮毫：奥村一郎
発行所
聖母女学院短期大学同窓会
〒612-0878
京都市伏見区深草田谷町1
聖母女学院短期大学内
電話（075）643-6781
FAX（075）643-8786
編集発行
聖母女学院短期大学同窓会

「母校は生き残る」

会長　岩田英子

会員の皆様つつがなくお過しでしょうか、お伺い申し上げます。過日、平成九年度同窓会活動報告及び会計報告会議に出席いたしまし折「残念無念、有名女子短大が消えていく」と言うショッキングな見出しの記事が貼ってあり、思わず釘づけになってしまいました。昨今「女子短期大学冬の時代」といわれ十八歳人口が減少しつづけている事は皆様も御周知のことでしょう。現実は私達の想像をはるかに超えて厳しく、同窓会も漫然としていられません。この欄をお借りして皆様に御認識して頂き強力なバックアップをお願いしたいと思います。

記事によると女子短大とはかつて女性にとっては最高学府のひとつで花嫁学校の役割も果たす存在でした。しかし今、志願者減に悩まされ有名女子短大が次々と廃止に追い込まれています。短大御三家と称されたトンタン・ガクタン・アオタン全てが姿を消すことになり関西では帝塚山学院短大が来春に廃校となり同志社女子短大、甲南女子短大部が廃止を検討中です。これまで高卒女子の進学率は常に短大が四大を上回ってきましたが平成八年にその数字が逆転し、以後差は広まるばかりで短大離れは深刻です。原因はさまざまに指摘されています。

・かつての花嫁学校的使命が終わったのではないか。

・男女雇用機会均等法が施行され総合職として就職するには四大卒の経歴が必要となり女子の高学歴志向が強まる。

・景気の低迷で企業が短大卒一般職の採用を控え就職に強いという短大神話が崩れた。

ベネッセコーポレーション進研情報センター長は「就職協定の廃止で活動期が長くなり、学生生活を謳歌する時期が一年しかなくなった。これは致命的です」と指摘しています。またここ数年、短大を卒業して四年制大学の三年次編入試験を受けるケースが一般化して最初から四大への編入を目指し短大へ入学する学生も多いそうです。短大の多くが新しく四年制に移行したり、併存していた四年制の一学部に改組されています。「しかし、短大をそのまま四大化して『延命治療』しても最初の一、二年は良くてもその後は低空飛行に陥るケースが多い。」と河合塾の進路指導担当者は厳しい。十八歳人口は平成四年の二百五万人をピークに激減の一途。来年度は百五十五万人まで減少すると見られます。この「短大冬の時代」にあえて楽観論を唱える日本私立短期大学協会の事務局長は「短大の就職率は落ちていない。経営面も短大のほうが安定する。女子の高学歴志向が進むと、四大に進学できなかった女子学生は必ず短大に戻ってきます。四年後を見てて下さい。」

私なりに記事の内容を要約してみましたが、母校も例外ではなく冬の風にさらされています。以前より危惧を持っておられた教授、先生の方々が主になり「聖母女学院短大」の存続をかけて真剣に取り組んでおられます。同窓会も昨年より新聞広告、学校案内パンフレット、ポスターの発行等に協力させて頂いています。さらに同窓会員の皆様にも卒業生として母校の存続、発展を願ってそれぞれの領域分野でお力添えくださいますように心よりお願い申します。

末筆ですが、七十周年記念事業募金に多くの方々のご協力を賜りましたことに感謝して御礼申し上げます。

雑感

遠藤金次

早いもので、二〇世紀は残り二年余りしかありません。

振り返ってみると、今世紀前半は、日露戦争に始まり太平洋戦争まで戦争に明け暮れ、あげくの果てに敗戦によってドン底の暮らしを余儀なくされました。後半は、ドン底からの再出発となり、懸命の努力によって世界でも例のないほどの速度で経済成長を遂げました。しかし、バブル経済の崩壊以後、将来への展望は必ずしも明るいとは言えないのが現状のようです。

子供の頃「我が国の人口増加率は大きいが、欧米のそれは小さい。だから、いずれ日本は世界を制覇する」と聞かされた記憶があります。ところが、世界制覇は兎も角として、この所、日本の人口増加率は低下する一方です。人口問題研究所の推計によれば、我が国の人口は約一〇年後にはピークを迎え、その後次第に減少し、来世紀の半ばには、現在の一、二五億から一、〇億に減るそうです。貧乏人の子沢山が普通であった子供の頃、まさか今のような時代が来るとは考えもしませんでしたが、少子化（勿論、こんな言葉もありませんでした）の影響は随所に顕在化しつつあります。

小生の卒業した京都市内の小学校も昨年とうとう隣接校に統合されてしまいました。実は、小生の場合、小学校だけでなく、出身の中学校も専門学校も戦後の学制改革の際に潰されています。大して愛校心のある方ではありませんが、帰るべき故郷も母校もないと思うと、何とも索漠としたものを感じます。

少子化の波が大学にも及ぶのは必至であり、小生が聖母女学院にお世話になった四年の間でも、受験生数の減少は否定すべくもありませんでした。聖母はオットリした小さい短大であるだけに、世間から忘れられてしまう危険があります。私学とくに本学のように心の絆を大切にするところの卒業生諸姉にとって、心の支えになってくれる場所としての母校の存在意義は大きいと考えられますが、おおげさに言えば、今や大学存亡の時です。大学も、時流を見ながら企業努力をすることが求められていますが、せめて聖母だけは、時流に阿らず、右顧左眄することなく学風を守って行くような、悠々たる存在であってほしいと思います。母校愛とは縁のない小生が言うのもおかしいのですが、多分、卒業生の諸姉各自が、一生の間に一人の受験生を母校へ紹介する労を厭わなければ、小なりといえども、変わらない姿の聖母が存在し続けることができるはずです。

母校への一掬のお力添えをお願いすると共に、諸姉のご多幸、ご健勝をお祈りします。

光、もとめて。

ホームヘルパーの資格認定講座

◆聖母教育文化センターから

シスター　小川　英子

21世紀は長寿化・少子化がますます著しく、我が国の高齢化社会は非常な速度で進んでいます。それは、介護を必要とする高齢者が確実に増加しているということです。一般社会でそう言われるだけではなく、各家庭でも、大きな課題になっているのではないでしょうか。

そして、介護の知識をもっていれば、もっと良くお世話できるのにと考えておられる方、少し時間的余裕ができたので、自分の家族だけではなく、この私の時間を地域社会のために使いたいと思っておられる方も増えてきていると思います。

今日の社会は「施設」より、「在宅」での生活が勧められる時代です。生活を支える介護が求められています。こうした動きの中で、ホーム・ヘルパーの存在はとても重要かつ不可欠になっています。

聖母教育文化センターでは、このような社会の要請に応えて近いうちに「ホーム・ヘルパー養成」の研修事業を始めたいと企画しています。ここでは、ホーム・ヘルパー資格（2級）を申請する予定です。この養成は専門的知識、技術の修得だけでなく、基本にキリスト教的な人間観に基づく高い倫理性、人間性をもつ養成ができればと望んでいます。

ここでも、聖母教育の真価を発揮できるのではないかと思いますし、多くの卒業生や保護者が、この機会を利用され、その基盤つくりに参加してくださることを期待いたします。

聖母教育文化センターのいくつかの基本方針のなかの、

・開かれた学園、保護者・卒業生・地域社会との連携

・生涯学習の要請に応える

という目的のためにも、この企画を成功させたいと思います。

開設予定　平成十年十月～平成十一年三月

毎週土曜日

場所　聖母女学院本館

費用　未定

募集要項など具体的なことは申請許可が出てからでなければ配付できないのですが、申請は開始前の限定された時期なので最初の募集に、受講者があるかどうかも未知数です。同窓生からのお問い合わせ、反応などをお待ちしています。

いづれにしても、聖母女学院としては将来の日本社会に貢献する重要な「核」として、社会福祉的な側面をこのような形で打ち出していきたいと考えております。カトリック教会が、イエス・キリストが生きられたように、社会から見捨てられた、忘れられた苦しむ人たちと連帯して共に生きることを勧めているようにわたしたちもささやかながら、今年、第一歩を踏み出したいと願っております。

いよいよ開講

受講申込先
〒612-0878
京都市伏見区深草田谷町1
聖母教育文化センター係

第20回卒展記念特集

1998年2月、児童教育学科・美術科研究室主催による卒業作品展が20回を迎えました。

旧校舎の設備・施設なにもかも不備な状態から出発。20年間に生み出された作品は千点あまり。その作品の多数が小学校特別学級・幼稚園・保育園・障害児施設に引き取られ、多くの子ども達に愛され、遊ばれてきました。ちいさな短大の一つの研究室がII回生全員と（子ども達のための遊具）制作に取り組み20年。全国の短期大学の中でも類を見ない作品展に発展しました。

児童教育学科の卒業生の多くが卒業制作を機会に母校にかえってきます。2年間という短い学生生活のしめくくりで経験する共同制作は、卒業後の大きなつながりになっているようです。

会報3号では、卒業制作の特集をくみ、懐かしい美術研究室の先生方・卒業生に登場していただきました。

生かされ生きてきた20年
第20回卒業作品展を終えて

児童教育学科　中原　喜郎

一口に20年と言いますと、「ふーん」てなものですが、生まれた子どもが成人式を迎える。今回の制作者たちが生まれた、まさにその年にスタートしたのです。

児童教育学科の学生であるならば、卒業前に学んだ知識と体験を「遊具」という形にまとめてみるのも良いではないか。木材という材料は女性にとって一寸手強そうだから、あえてそういう素材に挑むのも良いではないか。一人でつくるより、皆でもてる力をだしあえばよいじゃないか。

こんな思いで始めた卒展に私の人生の3分の1近く、山成（旧姓・後藤）先生の2分の1程も、関わってしまったのですから、いささか驚きです。

私の子どもたちも、毎年会場に遊びに来ることを楽しみにし、卒業いたしました。

毎年の学生諸君の熱意、かかわってくださった多くの先生方の情熱によるところが本当におおきくて、止めるにやめられないというところでしょうか。

20年にわたる児童教育学科の卒業生諸君、内山秀樹・大国章夫・藤本修三・笹尾周平・小林信雄・磯部耕一・徳本正孝・山成昭世の諸先生のお力で卒展は生かされ続けてくることができました。

「継続は力なり」といいますが、今年の記念講演には、今江祥智先生も駆けつけてくださいました。特筆すべきは「誰のための講演ですか」との今江先生の質問に「卒業生のための、学生のための講演です」と私が応えると、「わかりました」後は手弁当で応援してくださいました。多くの卒業生、多くの人々の聖母への思いが卒展を続けさせ聖母の未来を支えてくれるのだと思います。感謝！

20年を振り返って

夙川学院短期大学　小林　伸雄

児童教育学科で卒業制作展を始めて早いもので今年で二十年。美術系・芸術系の学部では当たり前の卒展ですが、児童教育学科においては、全国でも珍しくユニークな試みとしてスタートしました。私も当初からスタッフの一員として関わらせて頂きましたが、何しろ前例のないことなので、最初の頃は教員も学生も手探り、試行錯誤の連続であったように記憶しています。

木工を中心とした、子どもたちのための遊具を制作するというテーマは今も変わらないのですが、最初は設備や道具類も今のように整っていない上、こちらのノウハウも乏しく、学生の「こういうものを作りたい」という意欲とでき上がった作品との間に、大きなズレを生じたことも結構あったと思います。

また、せっかく完成した作品が、来場してくれた子どもたちの激しい攻撃（？）に遭い、会期初日に脆くも壊れ去ってしまったことも一度や二度ではありません。しかしそんなことの積み重ねが、次の世代を刺激し、教員のノウハウを蓄積させてくれました。そしてそれは確実に作品に反映していったように思います。それがあったからこそ二十年もこの卒展を続けていくことができたのでしょう。

それにしても、初期の学生たちの制作意欲はすさまじいものがありました。一見実現不可能な夢のようなアイデアをその意欲に押されて、何とか実現させてやりたいと学生と一緒に知恵を絞ったことを思い出します。最近はこちらのノウハウがある程度確立され、頭を悩まされるような作品が少なくなったような気がします。

この二十年間には子どもを取り巻く環境も大きく変化しています。ここらでひとつ今までにはなかったような斬新なアイデアで、教員の頭を悩まし、子どもたちの心を虜にするような作品の登場を期待したいものです。

「卒業制作によせて」

笹尾　周平

荒廃した心のひずみが原因と思われる、若者の引き起こす、かって想像もできなかった事件を聞くたび、暗い気持ちになり、未来に不安を感じてしまいます。これらの事件は今、解決することすらも、要因を見つけることも容易にできないほど、深く複雑な問題を含んでいます。私たち幼児教育に携わる者は、この現実をしっかり捉えた上で、子供達とふれ合い、考えていかなければなりません。私たちは卒業制作で遊具を作ることによって子供達の「遊び」について考えてきました。今日子供達を取り巻く環境は管理され、情緒性は無駄なことといわんばかりに削られ、不毛な画一化に向かっているように思えます。物質的にのみ豊かになり、情報で統一されようとしている社会は子供達の「遊び」の世界までも管理しようとしているのではないでしょうか。子供達の「遊び」の領域は自由と自発性をもっとも重視される世界です。私たちはそこで子供達の手助けは出来ても、彼らを操ることは出来ないはずです。私たちは懐古趣味に陥らず、今日問われる、真の「遊び」を取り戻すべく子供達と一緒に今一度考えてゆきたいと思います。

卒業作品展に思う

九州大谷短期大学　内山　秀樹

展覧会が第20回を迎えられた事に、第1回から第4回まで、この展覧会のいわば乳幼児期にかかわった一人として心からその成人をお祝い申し上げます。

産声をあげた第1回は、十期生の初、幼教計百五十四名がグループにわかれて創作した四十五点を展示。ベニヤ板一枚で遊具、教具を制作するという課題は、内容、技術ともに要求水準が高く、わずかに実習でしか子どもを知らず、のこぎりも持ったことのない女子学生が挑戦して好結果は望むべくもなく、中には類似の商品を買った方がよかったのではと思えるような物さえあった。ところが、展覧会前日、準備をしている学生たちが、ちょっとはずかしそうにではあるが、妙に満足気で、作品を前にして何かこう、いい表情で会場のそこここでグループで話しているのである。そんな学生達の様子が印象的であった。きっと、今や展覧会を作者の立場で迎えようとしている、表現主体としての誇りのようなものであったかと思う。又、「女」の私が材木を扱い、電動工具までなんとか使いこなして、ゼロから自分達でつくりあげたという満足感であったかとも思う。又、「子どものために」という話しあいを重ね、子どもの具体にせまろうとすることで、きざしの様なものであれ、「子ども観」に「私の」と一人ひとりの学生が言えそうな気がしていたからであったかと思うのである。なる程、短大児童教育学科は遊具の工場ではなく、学生を育てる場として確かに機能していたとなつかしく思いだす。

（みんなおばさんになっているのかな、私は今年五十才になります。）

第21回卒業作品展
会期　平成11年2月9日【火】～2月11日【木】

作品展の原点に思う

児童十回卒　小嶋　十糸子
（旧姓・石村）

幼児のための作品作り第1期生の私の思い出は、小学校の図工室の裸電球、足まで凍えそうな底冷え、無我夢中で作った私の作品、「アヒルのゆりかご」です。子どものころからブランコの大好きな私が思いついた作品作りのアイデア、そこまではよかったのですが、円形のアヒルが思ったようになかなか揺れなくて悩んだあの時が今も鮮明に残っています。

自分の制作技術の拙さを忘れ、自分の作品をどのようにすれば、子どもを夢の世界に誘えるものかと頭を悩まし、真っ暗な冬空の下、悲しくなったこともしばしば。でも、1ヵ月半もかけてようやく出来上がれば、嬉しいもの。「なかなか上手いものよ。」とこれまた制作者二人で感心したものです。

間借り同然でスタートした卒業作品展。あの作品展がここまで続くとは思ってもみませんでした。卒展も回を重ねるごとに立派な作品展へと成長し、ご指導いただいている先生方の熱気溢れる指導ぶりが今もここにありという感じがいたしました。幸運にも、20回卒展の作品を、私が関わるキンダーガーデンで使わせて頂いております。子どもたちは朝の挨拶もそこそこに、いつもこの作品に乗ったり、中に入ったりと、一生懸命遊び、なぜか笑顔が絶えません。

卒業作品展に学生として社会人として、また母親として今も参加させて頂いていることは、聖母卒業生冥利に尽きます。

20回目の記念すべき作品展では、私たちが大好きだった児童文学作家の今江祥智先生のあの懐かしい「講義」を聞き、20年の歳月を忘れて思わず当時の学生にタイムスリップしたような気持ちになりました。

今後もこの卒業作品展が回を重ねることを願わずにはいられません。そして、私たちOGにとっても楽しみな卒業作品展の案内をいつまでもいつまでも頂ければと、ひそかに思っております。

卒業作品展に出かけて

児童十八回卒　聖母学院幼稚園教諭
富井　幹子

自分たちの色々な思いを込めて学生生活の締め括りをする卒業作品展。この時期は、幼稚園の子どもたちにとっても、学年の総仕上げである生活発表会がありますが、どんなに忙しくても子どもたちと出かけています。

作品展会場の中での子どもたちの表情は、生き生きとし、瞳にとび込んでくるあそびきれない程の作品に、声も出さずまっしぐらに飛びつき、あそび始めます。「先生！見て見て！」「こっちに来てよ。ほら！」と汽車に乗って手を振ったり、大きな積み木のてっぺんで自慢気に立ち上がってニコニコ笑ったり、子どもたちの笑顔ははちきれそうです。目と手と体を巧みに動かし、一生懸命あそんでいる姿を見て、これが子どもの本能的な動きなのかなあと思うほどで、子どもたちがあそぶことによって、作品が遊具として変化していくのをいつも感じていました。

私も短大生時代に実際に卒業制作を経験しましたが、作っている時は、本当に子どもたちが喜んであそんでくれるだろうかととても心配したものです。しかし、子どもたちにとってどんな作品も『乗ってみたい』『動かしてみたい』『あそんでみたい』と思えるほど魅力的で、その作品のおもしろさを、何度も何度もくり返し味わっている子どもたちの姿を目の当たりにしますと、慣れないかなづちやのこぎりを持ち、友達と遅くまで時間をかけて協力して制作したことの意義を実感します。

「帰るから集まりましょう」と声がけてもなかなか遊具から離れず、ようやく集合する子どもたち。短大から幼稚園の帰り道、子どもたちが、「おもしろかったね」「楽しかったね」と話し合っている様子は微笑ましく「先生、また来たいね」の言葉に、短大時代に作った作品の感想を聞かされたようで、何とも心が温かくなる一時です。

「20回の卒展　二十歳の私」

児童二十九回卒　専攻科
遠藤　雅絵

普段は沢山の机が並ぶ大学の教室が、卒業作品展の間だけは沢山の子どもたちによって、まるで近所の公園のように変えられていました。そんな光景を目の当たりにして、その時に初めて私たちの制作してきた遊具の本当の意味での完成をみたような気がします。

今年は、制作者である私たちが成人式を迎えたことと同時に聖母の卒業作品展もまた、第二十回という節目を迎える年でもありました。しかし正直なところ、この二十年という歳月を、あまり実感することはできませんでした。ところが、たった三日間という作品展の間には一般の方だけでなく大勢の先輩方が、子どもたちを連れて帰って来て下さいました。そして第二十回記念企画としての講演をして下さった今江祥智先生のお話には、確かに私たちの知らない聖母の姿が、沢山詰まっていました。ひと口に二十年とは言っても、この二十年という時間は、私たちにとって、予想以上に重みを感じるものでした。

今年、誕生した作品はすべてこの第二十回の卒業制作展において、しかも二十歳の私たちにしか表現することはできなかっただろうと思います。しかし、制作中の苦労や作品に対する思いは、すべての先輩方と共有できるものであると思います。

これから先、この卒業作品展が、何百回、何千回を迎えたとしても、きっとその時に制作する後輩たちもまた、このような体験を自然と受け継いでいて、そしてその中でまた、新たな創造が多く生まれるのだと思います。

第二十回の卒業作品展を今年無事に終了し、多くの先輩方をはじめ、沢山の方々と触れ合うことができたことは、この第二十回に制作した私たちにとってまさに、聖母の歴史の一部としての「私」を、初めて見つめることのできた機会でもあったと思います。私たちの知らない聖母が残していってくれたものにもまた、大切にしていきたいと思います。

第二・三回「ゆりの会」ゴルフコンペに参加して

家政十回卒　米山　佳子

「ゆりの会」ゴルフコンペが平成九年二月二十六日枚方国際ゴルフ倶楽部にて行われました。第一回より参加されている方、初めて参加の方、今回は残念乍ら欠席された方などと出席者確認や近況報告と共に朝、クラブハウスでまずはひとしきり再会をなつかしみ一日がはじまります。同じ組でプレーしますと一層親しくお話しもはずみ同窓の相通ずるものを感じ学年を越えたおつきあいにとても楽しい時間を過ごしました。

「ゆりの会コンペ」のホームコースになっております「枚方国際ゴルフ倶楽部」は幹事様が長年のメンバーで居られる為か、キャディーさんはじめ倶楽部の皆さんがとても親切でいつもゆったりと気持ち良くプレーできます。参加されている方々はスコアーはさておき、再会を共に歓びゴルフを楽しみ徐々に学生気分にもどり青春を謳歌されている様に思いました。

さわやかな気持ちでホールアウトし、お風呂で疲れを癒し、お茶を飲み乍らの成績発表、今日のプレーを振り返りお話がはずみます。そして次回お会いする事を約束し散会となります。

会長様、幹事様、御一緒させて頂いた皆様、お世話になり有難うございました。

今後もゴルフを通してより多くの同窓の輪が広がり楽しく交流しあえる会になります様、祈念いたします。

第4回『ゆりの会』ゴルフコンペ開催

（同窓会会長　岩田　英子）

○日時　平成10年9月25日（金）
9時30分集合
○場所　枚方国際ゴルフ倶楽部
枚方市津田4546番地
TEL、0720・58・8311
○申込み締切日　平成10年9月19日（土）
○費用　3、000円
○幹事　熊谷頼子
TEL、0720・47・7317
山口淑子
TEL、0720・43・0789

～ 聖母フォーラム'98開催 ～

平成10年1月24日短大講堂において、聖母フォーラム'98と題し、映画『地球交響曲～ガイアシンフォニー第3番～』の上映と講演の集いを開催しました。

昨年の12月の地球温暖化防止京都会議をきっかけに、地球環境について考える場を短大生、聖母学院全保護者、カトリック教会や修道院、そして伏見地域の住民に広く提供しようと、約2時間半の映画上映と共に、制作した龍村仁監督の講演を企画しました。

今回は予想以上に関心が寄せられ「上映会のポスターを見て喜んで来ました。」と沢山の同窓生の姿も見受けられました。約1,200人を超す来場に、講堂内は熱気に溢れ、「地球の命」について実感した1日でした。

湯川佳一郎先生のご近況

家政学科1・2・3回卒業生のみなさんには、とても懐かしいお名前と存じます。先生のチョッピリ皮肉のきいた講義（哲学）風景を、思い出される方が多いのではないでしょうか。先生は今年3月法政大学をご退任になり現在週1回大学院の講義に通われているそうです。ご退任パーティには第1回卒業生有志によるお花で先生に感謝申し上げました。

「伊藤先生安らかに…」

児童八回卒
北尾　美智江（旧姓平井）

「伊藤先生がお亡くなりになられました。」五月二日の朝に悲しい連絡を受けました。前々日に「胸が痛い」と訴えられ入院されたその翌日に、あまりにも早く天国へ旅立たれてしまいました。

私は、児童教育学科の理科研究室で初めての副手として採用され、伊藤先生のご指導のもとで働かせていただきました。授業では、サバ・ニワトリ・カエル等の解剖を行ったり、夏休みには「聖母林間学校」を企画され、たくさんの小学生を募集し、自然の中での体験学習を指導されました。一番印象に残っているのは、ハチ北高原での野外活動で、学生と一緒に豚の丸焼きをしたことです。子豚でしたが丸ごと一頭を鉄の棒にさして火をおこし長い時間をかけて焼き上げました。火の粉が飛んだり煙りで目から涙を流しながらも、先生は学生たちと一つになって楽しみ、指導されていました。今から思えば、こんな大胆な野外活動、学習はあの頃だけで、とても貴重な体験でした。卒業してからもいつまでも懐しい思い出として多くの卒業生の心の中に残っていることと思います。

先生は、いつの時も学生を大切にされ、聖母を愛してこられました。聖母を退職されましてからも大学祭などの行事があれば必ずいらして下さいました。今年二月に卒業作品展で今江祥智先生の講演にもお見えになり「三月、四月は忙しいでしょうから五月に入ったらゆっくりお会いしましょう。」とお約束いたしましたが、その時にお会いしたのが、先生との最後になってしまいました。

五月九日に「友人葬」が短大のオラトリウムで行われ、ミサと「偲ぶ会」にはたくさんの方が参列されました。

少年のような心と輝きをいつまでも持ち続け、最後まで全力で教育に関わって来られた先生の姿と教えを心にきざみ、一日一日を大切に頑張ってまいりたいと思います。

伊藤先生、天国から私たちを見守りお導きください。

謹んでご冥福をお祈りいたします。

積もる感謝の思い
～卒業十年の節目に～

家政（食物栄養）二十五回卒
柳澤　清美

聖母での思い出は、二年間という短い期間ではありましたが、社会へ出る前の二年間、そして自ら専攻したものを学ぶ二年間は、たいへん貴重な時間であったように思います。

入学前は聖母という学校に、美しい学舎で、アットホームな雰囲気で、優しい女性を育てるという柔らかいイメージを持っておりました。勿論その通りでありましたが（?）、それだけではありません。専攻した食物栄養専攻はカリキュラムも忙しく、谷先生の栄養学の講義は難しく、山田先生、岸部先生の実習は厳しく、いつもレポート提出に追われていたように思います。ハードな毎日でしたが、充実した豊かな二年間でありました。だからこそ、卒業を迎えたときに大きな達成感を味わうことができたのだと思います。

専攻していた食物栄養とは別の分野に就職致しましたが、会社でも業務報告という形で、実験毎にレポートを提出しなければなりません。目的→方法→結果→考察、先生の指導された通りであります。業界のセミナーやユーザー先に出張するときは、学生時代に病院実習や企業実習に行ったときの緊張感を思い出します。先生方は、ときに母親のように挨拶や身だしなみなど、きめ細かく、あたたかく教育して下さいました。「学外実習後にはお礼状を書きなさい。」「調理室に雑菌を持ち込まないように、白衣を着たまま廊下に出てはいけません。」先生方の言葉を覚えております。あの頃の経験や先生方の教えが、今でも役に立っております。

また、学生時代の楽しかった思い出の一つに、一回生の春休みに参加したヨーロッパへの研修旅行があります。専攻は異なりましたが、二週間の旅で友情を深めた仲間達とは、卒業後もずっとおつきあいを重ね、今でもあの頃と同じように、集まっては楽しいおしゃべりをして騒ぎ、時間をつくっては旅行に出掛けたりしております。聖母で生涯の友人を得ることもでき、聖母への感謝の思いは、年を重ねる毎に大きくなるようです。

「卒業後のわたし」

社会福祉法人 京都市社会福祉協議会
伏見老人デイサービスセンター勤務
国際三回卒
柿本　恵子（旧姓　松本）

卒業後現在も勤めております会社には、聖母の卒業生が沢山おります。入社したときとても不安でしたが、初対面の先輩が聖母の卒業生というだけで、なぜか親近感が湧き、共通の話題があったことがうれしかったことを覚えております。今でも新人を迎えるとき、現在の聖母の様子を聞かせてもらうのが楽しみであります。先生方がお元気で教鞭を取られているのを聞いて、私も頑張ろうと励まされております。

聖母の益々の御発展を心よりお祈り申し上げます。

同窓生の皆様、ご卒業後いかがお過ごしでしょうか。

私は卒業後、就職をしたものの一年半で病気をし退職してしまいました。その時、壁にぶつかり、どういった仕事がしたいか考えました。そして転職し、その後、働きながら学べる佛教大学の通信教育課程に編入し、社会福祉を学びました。

働きながら、本を読み、レポートを提出し、授業を受け、試験を受け、現場実習に行くのは大変でしたが、何とか卒業でき社会福祉士の試験に合格することが出来ました。お陰様で現在は、老人デイサービスセンターで勤務してます。

福祉の勉強を始めてから、先が見えなくて不安な時期に、聖母にいらっしゃる先生にお便りを出しました。学生の頃、不真面目だった私のことを、覚えていて下さっているわけがないと思いつつも、お便りしました。半分諦めていたのですが、先生はお忙しい時間をやりくりしてくださって、私との時間を持って下さいました。その時の数時間は、とても貴重なものでした。今でも、本当に感謝しています。

今こうして健康で働けているのも、いろんな方のお力添えがあるからだと思います。皆それぞれ生きているといろんなことがあるかと思いますが、多くの方と助け合って生きていきたいと思います。私はまだ、周囲の方に助けられてばかりですが、これからも努力して少しでも社会の役に立てるような人間になりたいと思います。

何かのご縁で、皆様と再び巡り合う機会があるかと存じます。その時は、それぞれの聖母女学院への想いを語り合いたいです。

少しですが、私の卒業後の聖母女学院との関わりとその後の生活のお話をさせていただきました。

オープンキャンパスで母校をたずねよう

短大年間行事予定

4月	入学式
6月	創立記念日
7月	前期試験
11月	追悼ミサ
	1次推薦入試
12月	2次推薦入試
	大学祭
	クリスマスの集い
1月	後期試験
2月	学力入試（一次）
3月	学力入試（二次）
	専攻科入試
	卒業式

平成11年度　入試のご案内

試験日程（3学科共通）

	試験日
1次推薦選考	11月11日（水）
2次推薦選考	12月 5日（土）
1次学力選考	2月 4日（木）
2次学力選考	3月 5日（金）

詳細につきましては、学生募集要項を御参照下さい。

平成9年度会計報告

収入の部		支出の部	
科目	金額	科目	金額
同窓会費		同窓会名簿印刷費	283,500
生活科学科	1,700,000	卒業生記念品代	281,872
児童教育学科	1,620,000	同窓会会報代	189,000
国際文化学科	800,000	ポスター代	1,108,170
		印刷代・コピー代	3,330
		通信費	766,260
		振込手数料	3,294
		アルバイト代	51,400
合計	4,120,000	合計	2,686,826

※詳細は会計まで

平成9年度各学科役員紹介

○生活科学科
生活科学専攻役員（35回卒）
A 小谷　真理子　A 齋藤　多実子
B 中澤　瞳　B 堀家　知佳
食物栄養専攻役員（35回卒）
阪下　恭子　笹沼　あす果

○児童教育学科役員（29回卒）
A 明崎　可奈子　A 東野　久美
B 外池　容子　B 森西　奈穂子
B 阿曽　真沙代　B 濵中　まきこ
B 佐藤　望　B 杉江　盛
B 神吉　由希　B 中川　明子

○国際文化学科役員（9回卒）
上田　蘭　宇佐美　礼子
村田　弘美　吉本　昌代

同窓会便り

平成10年5月23日
第20回食物文化コースが新しくなった京都駅構内の豆腐料理店で開かれました。

平成10年6月28日
第11回食物栄養専攻
京都WEST21ビルで開かれました。

平成10年5月23日
第3回児童教育学科有志
大阪帝国ホテルの豆腐料理店で開かれました。

※各回期のお便りお待ちしています。

＊編集後記＊

会報3号に同封しましたオープンキャンパスのポスターは、同窓会により制作しました。皆様のお知り合いの方に配布をお願いいたします。

また、8月26日（水）～28日（金）の間、京都放送よりオープンキャンパスのラジオCMが同窓会提供で放送されます。

会報発行も3号となりました。短大冬の時代。原稿集め・編集の作業をしていると気分は暗くなるばかり。皆様からの楽しいお便り、情報をお待ちしています。

A. Y.